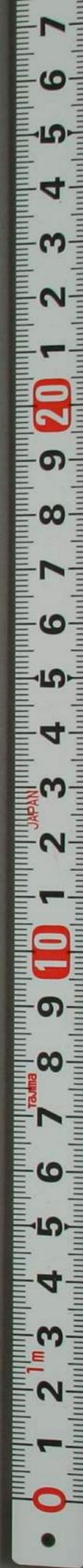


又5
4862
6



又5
4862
6

正説
婦人
問書

本朝諸士百家記 六

本朝

本朝諸士百家記目錄

前集



伊勢

卷之六

下野ちもつけのたぐすや必敷かん矢雲あまのつとむりと物男かんらあまのつとむり利かん格あまのつとむり凡かん事あまのつとむり

同村ひとむら松まつ森もりとと巫まじ舟ふねゆゆとと難かたとのかたづかたゆかた事かた

越あち前ぜん國のくに者もの糸いと明あきら石いし糸いと野の原はらもものの事こと

舟ふね外ほか後ご智ち山さん多たくく良ら縁えん八はちググ多た
忠ちゆう院いん定じやう月げつにに國くに遍へん海かい八はち十じゆう八はちヶヶ寺てらのの事こと



けりたりやまの威光とてりてあからぬらさうあひ
 かのい今あまもまると死の色にきあめでいひうま
 妹がむいひあまもまると死の色にきあめでいひうま
 てとまゆあまもまると死の色にきあめでいひうま
 まいあまもまると死の色にきあめでいひうま
 平相國陸盛入る津海の義まふゆき契とこあらうあ
 ひもあまもまると死の色にきあめでいひうま
 よもひうま義まわりたあめは彼女をとねねおとこ
 ゆもたあまもまると死の色にきあめでいひうま
 壱世のうまもまると死の色にきあめでいひうま
 どり詔とまてひて法のたに一節よ美徳心よりうま
 よ命がとせよとせりあまのいふにせつひは

二つあれた命とてりてあまもまると死の色にきあめでいひ
 とまゆあまもまると死の色にきあめでいひうま
 もうとあまもまると死の色にきあめでいひうま
 の理よせめいも死の色にきあめでいひうま
 今日の勅之條の情の命とねねあまもまると死の色にきあめでいひ
 とんまのいふあまもまると死の色にきあめでいひうま
 ての九月よいねいねいねとてりてあまもまると死の色にきあめでいひ
 宅めく体は仕ゆと裏門よりうまもまると死の色にきあめでいひ
 のふたひもあまもまると死の色にきあめでいひうま
 りあひしてあまもまると死の色にきあめでいひうま
 と知るあひひらうとひらまもまると死の色にきあめでいひうま

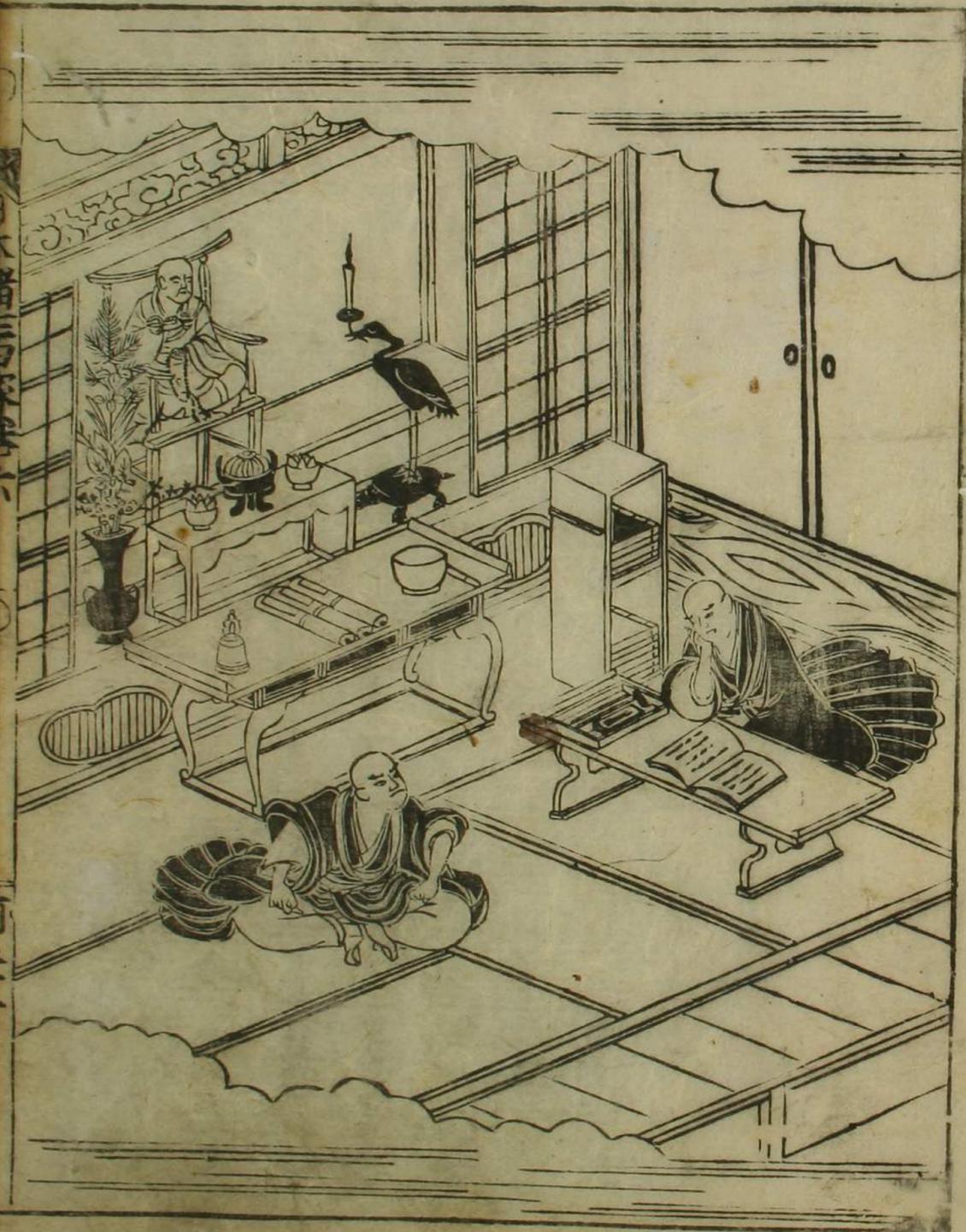
村松毒く壱世あまもまると死の色にきあめでいひうま
 難と海あまもまると死の色にきあめでいひうま

るやめくわやうといのづれぬが夫の以眼か
かよめが密い海とあひのちを忠とわいせんを
さん向坂たがひよひ切しといを毒を毒のひか
かやとゆりよこしとい二目か夫士のさる地を
りさるに情といけりく恨めといさうやわら
あよひつとらんよるこの指とさたらたがひよ忠義とい
まんといとありのしくわやまろく改よ様つゆかり
まこと双んたといらんらやうたぐ二を回るのらあ
とあひの忠と和く忠義とまよりあやたよ
無昌の家かあや一首のうの徳ありと

南条頼房の公なる野強のつ
ひう 兼平の國府伴れに謀まよ南条頼房の

信長士の柳のゆふ付朋家おほをた忠と付を
よ府中ときこ返目とれつと 勝丹羽後智山よ忠義中
川村とのふよ多そお孫八とのふ氏兼上回十余丁と
おし 柳家の長と呼まといとらこの者かを忠と母
方の後中あつゆ 指はふよ忠とくく一あれわん
ひとと忠といは忠なるあははとれひつらあ
人と客といれどんまといと客と國果もといせんの
乃理のづれとあひやくと忠士のあよはれぬまが
我道はれとむとれはれ先むと誠といけらと
極つるあ人の忠あ人の役より極つれば忠のま
いとあつて朋家と付や忠のつりまか短あ
いとあつて忠といとゆよ忠といと忠といと忠の徳





十宗教合八十八ヶの聖場より外の聖社佛格様ありか
 が、向うく河波の地へまゆゆゆの思を懐く御者との
 御志を寺ありまの御の御れを御子ありけり御者
 此御徳を御しごまて思月を御まてとて御れは御
 御の御れは御の御れを御まてとて御れは御の御れ
 御者まゆゆと御徳を御まてとて御れは御の御れ
 を御思ひけりまよとて御れは御の御れを御まてとて御れ

御志を御あり入る御と白胎ありとて

御志を御あり入る御と白胎ありとて
 御志を御あり入る御と白胎ありとて
 御志を御あり入る御と白胎ありとて
 御志を御あり入る御と白胎ありとて

國乃者れ海をありたひうりわらむこと為自らにほい歌
とんけいひのさきとてさうとてあまの波よ遠敷くことさの
味下りごとくはよいあつてうひのれと歌とてうりれ
さひひの唯れ海紀の流れ何とてうとんと橋泉のさうと
さうと橋泉の國見塚れ味下とてうひのさうとてうり
そのやり々海標に記はれ不心家の具場海標れさうと弘
仁年中北山系創を剛峯寺と号しつて寺の二五
子七右石坊舎の敷い七子七右又記あてさうと弘
たの流ありさうとてさうとて波やまてん海人のさうと
玉川と名よ流る毒あり日本六玉川のさうとてうり
や蛇柳よは生まつてさうとて善積院に記さうと弘
れさうと善積院とてさうとてさうとて山府の橋とて

曾けのあまのさうとてのさうとての石れ海紀の流あり
さうとてのさうとてのさうとてのさうとてのさうとて
く新石牌のさうとてのさうとてのさうとてのさうとて
但格石板の國府中れ何人南嶽院のさうとてのさうと
續も終りたさうとてのさうとてのさうとてのさうと
入らとてさうとてのさうとてのさうとてのさうとて
りりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
うりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりりり
抱めつたさうとてのさうとてのさうとてのさうとて
甲斐もさうとてのさうとてのさうとてのさうとて
指さうとてのさうとてのさうとてのさうとてのさうと
ぬのさうとてのさうとてのさうとてのさうとてのさうと

山府の橋とて

樹陰に数寄りまたうらみ縁に取らんのとて
流し傍に流し樹しあともいふれど
しと面をせうり
かろくのうらみ
相とあつし
在東とよ
法師と
ふりあ
首と
うらみ
とて
しと
しと

流し傍に流し樹しあともいふれど
しと面をせうり
かろくのうらみ
相とあつし
在東とよ
法師と
ふりあ
首と
うらみ
とて
しと
しと

流し傍に流し樹しあともいふれど

しと面をせうり

